恋日々

Nysa

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋日々

【Ｎコード】

Ｎ３８５８Ｅ

【作者名】

Ｎｙｓａ

【あらすじ】

奈美恵が恋の意味を探し、そのなかでいろいろ経験する。その最初の一歩。

出会い（前書き）

内容を真似したり転送するなどの行為を認めません。荒らしはやめて下さい。

出会い

すごく天気がいい日に
桃色の花びらが
ひらひら
踊っている。

太陽が降り注ぎ、
太陽の力に圧倒されたのか、雲ひとつない。

♪・・・♪・・・
（やっと入学式終わったぁ・・・）

そう思い奈美恵は
「ふぅ」
とため息をついた。
校庭に一つの大きな桜の木が立ってた。

奈美恵が少し見とれていた。

奈美恵のお母さんが人込みの中から嬉しそうに向かって来た。
「奈美恵、ちゃんとビデオ撮ったから！
家でみましょうっ」

「あ、うん！」

奈美恵。１２才
中学校の入学式。

それはとてもいい天気で

雲一つない空に

桃色の花びらがヒラヒラ

踊るように舞っていた。

入学式が始まる前
在校生はざわざわしていた。

「今年の1年どんな奴が入ってくるかな?!
やべー楽しみ!」

「そこまでないだろ、どうでもいーぜ」

「ばかちーん。出会いの季節に何をゆう。」

「いってーよ!」

「ほら、入場してくんべ!シーッ」

「チッ」

音楽と共に新学生が入場してきた。

可愛い子いないかな。

俊は無意識に女子ばかりみていた。

「何女子ばっか見てんだよ！フラれたばっかのくせによ。」

ちゃかすようにこうきがそうゆった。

「……うるせぇ」

さっきまではしゃいでいた俊は、
むっつりして機嫌を悪くしてしまった。

「さっき殴った分のお返しだ！」

俊とこうきは中2になる親友どうしだ。

俊
「…」

俊の目の先はもぅ新学生ではなく、

一人の女子を見ていた。

（なんでフラれたんだろうな、俺。）

俊は目が合った元カノの稟から悲しそうに目をそらし、そとの桜に目をうつした

「今年も桜きれーだな。」

話しかけてきたこうきに
俊は、花びらを見ながら頷いた。

それはとてもいい天気で

雲一つない空に

桃色の花びらがヒラヒラ

踊るように舞っていた。

奈美恵も中学に慣れてきた頃。

「柄本(ツカモト)先輩かっこよくない？」

奈美恵は（微妙だろ）と内心思っていた。

「てか、柄本先輩の下の名前聞いたし！」

「えー！何々？！」

「えーっと、たしか、『し』がついた…」

「しゅんだよ！しゅん！」

「そーそれそれ！記憶力よさげやー！」

そのとき放送が流れた

『みなさん。時効が7時となりました。下校の準備をして下校するように。』

奈美恵（もうこんな時間か…。）

奈美恵はテニス部に入った。
放課後はこうしてみんなではなす日が多かった。

「かえろっか！」

「じゃーね！」

奈美恵（なんか今日も普通に終わったなぁーー…皆恋してるみたいだな…）

「あっ。」

桜の木が立っていた

（入学式思い出すな……誰か…いる…？）

夕日でよく見えない

んーっ…

近寄っていくとテニス部の先輩だった。

下の名前は、

俊。

木の近くにいたのは

俊だった。

俊はひどく悲しい顔をしてる。

奈美恵（知らないふりしてたほうがいいよね、）

そう思って俊の前を通りすぎようとした

「安田じゃん！」

満面の笑顔で俊は奈美恵に話し掛ける

「早く帰れよなっ」

…

「なぁ？聞いてんのか？」

「あっはい！すいませんっ」

「あやまんなよっ」

（この人の笑った顔、こんななんだ）

奈美恵
「先輩、なんでここに？しかも一人で…」

俊は後ろの桜を
力一杯見上げる

そして奈美恵にまた顔を向け

「なんでだろーなっ」

俊は笑顔でそう言うと
じゃあなっと帰って
行った。

奈美恵と俊がまともに話したのはこれが最初だった。

奈美恵は、一人で

桜をしばらくながめていた

桜は夕日と一緒になって
とても綺麗だった

「なぁなぁなぁなぁ」

奈美恵と同じクラスで隣の席になり、仲良くなったたくやだ。

「なに。……ブッハハハ」

たくやは奈美恵に変顔をした

先生
「安田うるさい！」

奈美恵
「先生。たくやくんのせいです。」

先生
「うるさい！」

奈美恵
「はぁい、、」

先生はまた授業を始めた。

「まじたくやいつか殺すからね！」

「そう落ち込むなっ」

そうゆって笑うたくやを

奈美恵は冗談っぽく睨んだ

そんなたくやは意外にモテる
なにしろ、優しい。

奈美恵だってたくやを

いいな、と思う

たくやの斜めに座るテニス部でもあるきえは二人に

「いちゃいちゃしないのよー♪」

（ばか。）

そう思いながら奈美恵は少し照れ笑いする

たくや
「うるせーい」
たくやも顔が赤くなっていた

休み時間のチャイムと共にきえが奈美恵のとこに来た

きえ
「つーっやっと授業終わった」

奈美恵
「中１の内容って勉強しなくても余裕なんだよね？！」

きえ
「しらにゃ」

たくや
「俺もしらにゃ」

きえ
「またー！たくやは奈美恵が大好きなんだから！うちらの時間を頂戴ー」

「きえ！」

奈美恵はきえの腕を
ひいて廊下に向かった

「きえ、やめてよ、ちゃかすの！」

きえ
「ぶっちゃけどぅ思ってんの？！」

奈美恵
「は…？！」

きえ
「たくやのことよぉー！」

ドキッ

そんなに…ちゃかされたら意識しちゃうでしょ……

奈美恵
「分かんないかな」

笑ってごまかす。

きえ
「そっかぁ、あーあたしも恋したいよー」

奈美恵
「『も』ってなんだよ！」

きえ
「あたし、柄本先輩好きになっちゃおうかなぁー」

……

奈美恵
「いーんじゃない？」

あの日から柄本先輩と学校ですれちがうと目が合うようになり、

目が合っては笑っている。

だが、何も思ってはいない。

きえは

「考えとくよっ」

と笑いながら言った。

好きになるって、

自分からなろうと思ってなるものだっけ……

うーん、まぁその人の決めることだからいっかぁ

いいのかなぁ……

「奈美恵！さっきはごめんねっ授業始まるよ！行こうっ」

「うんっ」

たくや
「奈美恵…遅かったな、早く席につけよ」

…たくや？
なんか様子違う…

奈美恵
「言われなくてもつくし」

既に
社会の授業が始まっていた。

あーぁ…社会って本当眠いよ。

あと３５分もあるよ。寝ようとしたとき
たくやから四つ折の
紙が机の上に
置かれた。

…？

「たくや、…誰に回すの？この手紙」

たくやは口パクで

『お前』

たくやは奈美恵の顔をあまりみずにいった。

なんだろう。

奈美恵は先生に見つからないように

下で開いた

『俺さぁ

お前の事が

好き。

絶対幸せにするから

だから、

俺と付き合って

たくやより』

ーっ！！！！！！！

奈美恵は衝撃を受け、鼓動が高まっていた。

な、なに、なになになになに？！

つ、付き合って…？

本当？間違い？

何度読み返しても変わらない

待ってよ

そんな、たくやとあたしが釣り合う訳ないよ、

こんな凡人が…たくやに、

告られた?!

きえ
「エーーーッ?!」

「どうしようきえーっ」
「なに泣き目になってんのぉ!
でもびっくり!
たくやがさっきの授業のときに奈美恵に…」

「もーーーっやばいよ!」

「で?返事はしたの?」

「あの社会で目が開いてるくらいびっくりでなんも考えられなかっ

た！」

「ばかちーん！ここはオッケーするべしだよ！」

「いいのかなぁ？

はっきり言って好きかどうか分かんないし。」

「ばか！顔よし、性格よし、どこが悪い！

付き合ってみるべきだよ。」

「そうかぁ。…」

奈美恵

（いいなぁと

思っていたんだもん。

付き合って

みるべきかも

しれないな。）

奈美恵はドキドキが止まらないでいた

社会の残りの３５分は
ずっと下をむいていた

それで精一杯だった俊のクラスは2年で1番うるさいクラスだった。

こうき
「なぁ俊」

俊
「なんだよ？」

こうき
「お前フラれてから元気ねぇな」

俊
「…」

俊
「なぁ？…俺のフラれた理由知ってる？」

こうき
「しらねぇなぁ」

俊
「俺も。」

知らん。

しるわけがない。
俺が知らないのにこうきがしるわけもない。

何が聞きたいんだろう……

理由聞いたら忘れられるのかな。

俊
「なぁ、俺、なんかしたのかなぁ？」

こうき
「しらねぇなぁ」

俊
「俺も。」

俺、

なんかしたのかなぁ

忘れられねぇょ
稟

放課後。

渡り廊下を歩いていた俊は、

稟とのことを思い返していた。

よくここで手ぇつないだよな

未練くせぇなぁ
俺。

でも楽しかったな。

俊
「……！？凛…っ」

凛
「あっ…」

通り掛かった凛は避けるように引き戻そうとした。

俊
「待てよ、凛。」

凛
「凛なんて呼ばないで。」
冷たい目

俊
「…ごめん。…鈴木さん」

凛
「じゃぁ。」

俺達本当にもぅ他人なんだな、…

でも…

俊

「鈴木さん！」

稟

「なに…？」

俊

「俺、理由も聞けずにモヤモヤしてんだよね。

携帯変えたみたいだし。

なぁ、理由を聞かせて

それだけでいいから。」

「柄本くんのこと嫌いになったんだ」

「っわかった。」

とても言葉を返すのに時間がかかった気がした

そんな自分を

未練がましいとおもった。

これで忘れられるかな？

これですっきりしたのかな？

俺だけが、ずっと好きだったのかな奈美恵の
テニス部はたいして多くもない。

パコーン
パコーン

「柄本先輩！」

「お、安田もトイレかっ」

（奈美恵：本当に笑顔だなぁ…
つられてあたしまで笑顔になっちゃうっ）

「部室から新しいボールを持ってくるように頼まれたんですっ」

「俺も持ってやるよ！」
（俊：なごむなぁー…）

「えっあっいや、
いいですよ！手ェ洗ってなさそうだし」（ドキドキ）

「洗ったわい！石鹸で！」
ばしっ

「い、痛いですよぅ」

「ははははーっ！ほら、いくぞっ」

「はーい…」

二人で一緒に
ボールをもって
笑い合った

もぅ季節は夏になっていた。

部活がおわって
きえと部室にむかった

「奈美恵、柄本先輩と仲いいよねっ」

きえ…

「あっでもヤキモチとかじゃないからっ…」

「う、うん」

「着替えようかっ！ねっ」

靴下をはきながら思った

（…なんかあたし。浮気してるみたい）

浮気……？
なんで？

好きじゃないのに
ただなかがいいだけ……

でしょ？なんで言い切れないのかな
はてな　なんていらない

深く考えると
怖いよ

「奈美恵っ」
っあっ。
「たくや！！」
たくや…

たくやとはあれから、
付き合うことになった。
初めてのお付き合いだ。

らぶらぶだと学校ではもう有名になっていた。

たくや
「奈美恵っ」

笑顔のたくや。

たくや
「帰ろっ？」

奈美恵
「うんっ♪
またね、きえ！」
きえ
「幸せそうだねぇ、ばいばい、お二人さん！」

こうして二人で部活のあとにかえるのが二人の日課。

たくや
「なぁ～、」

手を繋いでる二人、

奈美恵
「ん？」

歩いて帰る二人、

たくや
「俺さっ奈美恵のことめっちゃすき。」

それが二人の今のしあわせだった

奈美恵
「ははははっあたしもー♪」

たくや
「いや、まぢだから。奈美恵に会えて、よかったから。」
たくやは手で口を覆い、
照れながら言った。
奈美恵は嬉しくなって
たくやにだきついた

「ふふふ」

たくやは抵抗せず奈美恵を抱きしめた

奈美恵はどきどきした。

夏。せみがなくなかで

二人のては汗ばんでいたけど
どちらとも離そうとはしなかった

「ずっと一緒にいてくれよな？」

奈美恵はたくやの胸の鼓動を聞きながら

うん、と頷いた。
「たくや、あたしもたくやにあえてよかったよ。」

「うん」

蝉の声がここちよく
二人をつつんだ。
たくやの前には
仁がうちわをあおいで
座っていた。

「たくやぁ。安田のことどんくらいすきー？」

「はっっ、あえてきくなよ、それ！」

「俺はきっとお前より好きだよ。」

「え…っお前っまぢかよ」

「あぁ。まぢだよ。ずっと前から好きだったんだ。たまごかけごはん。」

「……殺す。」

たくやは仁のうちわで仁を殴った

「その慌てよう、だいぶすきだな！お前の顔恐怖をみたかおになってたし！」

「……ばーか」

ひじをついてだらけるたくや

「好きだよ。どうしようもないくらい。誰にもまけねぇー」

「ばかはおまえだっ」

仁は笑ってたくやを殴る

「ばかだし！」

笑って殴り返す。

「どんくらい続くのかなぁ」

「自信は？」

「あーるっ♪」

「その自信ももうすぐ消えるかもな。」

「は？っ……なんでぇ？」

「…あちーな。」

仁はまたうちわをあおぎはじめた。

「…おう。」

「仲いいっぽいな」

「え？当たりまえー♪ラブラブだしっ」

「安田と先輩。」

……

「あ、あぁ！奈美恵、愛嬌いいもんな、」

「男子の柄本先輩と。」

「…だぁれ？」

「俺見たんだ。」

…

「は？な、なにを？」

出会い（後書き）

これからも頑張って書いていくので、どうかみてください（、∀、）

2：困惑

たくや
「なぁ、見たって何をだよ？」

仁
「キスしてた」

たくや
「はっ。嘘だろ……」

仁
「嘘だよ……」

たくや
「……殺す！」

たくやは仁をうちわでまた殴った

仁
「ハハハっばか、うそうそ！」

（たくや：びっくりした…）

仁
「でもな。仲良く話してたのは見たぜ。多分部活のとき。」

たくや
「…話してただけだろ…？」

仁
「まぁな。
だけどよく笑ってたぜ」

たくや
「…笑ってただけだよ。」

二人に沈黙が流れ
その話は終わった

先生
「皆ー！！席につけーー！」

――――――・・・・・・。

なぁ奈美恵

このくらいで心配してちゃ

呆れるよな

・・・・・・――――――。

奈美恵

「ん？何見てんの？顔になんかついてる？」

たくや

「んっ。あ、べつに」

（たくや：大丈夫だよなっ）

「今日一緒に帰れる？」

口パクに笑顔で聞くたくや。

「うんっ、」

奈美恵もニコリと笑った。

放課後。

きえ
「奈美恵！部活、行こうっ」

奈美恵
「うん！」

たくや
「奈美恵！今日、何時くらいにおわる？」

奈美恵
「6時くらいだよ！」

たくや
「わかった。じゃ野球終わったら行く！」

たくやは野球部だ。

奈美恵
「はーい！じゃ、また後でね！」

奈美恵ときえは
テニスコートに向かった

きえ
「あ…柄本先輩だ」

俊は女の子と話していた

きえ
「やだっ！…って、泣いてない？
奈美恵、近寄ろう！」

。。。。。。。。

俊

「誰？見たこともないし」

「あたしは知ってたのに……ひどい…」

俊

「無理。ごめん」

俊はそのままテニスコートに入って行った。

「ありえない！！」

女の子は走って行った。

きえ

「…修羅場。」

奈美恵

「告られたんだよ」

きえ

「うん。…やっぱもてるんだ」

奈美恵

「冷たい目だったね。」

きえ
「かっこいい…柄本先輩かっけーぇ！」

奈美恵
「えぇ諦めどこじゃないの！？」

きえ
「惚れるーー！」

奈美恵
「ばかっ！練習、始まるよっ！」

「奈美恵っ！

あたし
、柄本先輩のこと好きになっちゃった！」

テニスコートに向かう奈美恵にきえはゆった。

「そっ…か……頑張ってね」

「うんっ」
きえは幸せそうに笑ってる。

（奈美恵：本気…じゃないよね……）

奈美恵はなぜか心が
バクバクしてた。

（奈美恵：
なんか。
あたし、おかしいよ。
なんで？

考えない。

考えない。

考えると怖いから。）

奈美恵達が
テニスコートに入ると
もう俊は練習を始めていた

テニス部の2年で俊と仲良い
光（コウ）が俊に話し掛けた

「さっきの可哀相だったよ。」

俊
「…」

光
「お前まだ…」

俊
「うるせえな。」

光
「…あのな、」

俊
「なんだよ。集中できねぇよ」

〈パコーン！〉

俊の打ったボールが
勢いよく的にあたった

「「ナイスショーット！」」

部員の声が響く。

光はそれから話し掛けるのをやめた。

〈パコーン！〉

俊の隣のコートから
同じ音がなった

「「ナイスショーット！」」

きえ
「やっぱい！奈美恵ナイスショットだよぉ」

奈美恵
「へへへ、習っててよかったよ！」

きえ
「あたしもならいたーい！」

奈美恵
「ほら、次きえ！」

中1も部活でボールに
触らせてもらえるようになった

〈ピーッ〉

コーチ
「はーい！集合〜！」

〈タタタタタ・・・・〉

コーチ
「夏休みに試合があります！そのレギュラーを発表しまーす！」

「え〜、男子は…〇〇、〇〇〇、〇〇、〇…〜」

きえ
「やっぱり柄本先輩選ばれたねっ」

奈美恵
「上手いもんねっ」
小声で話した。

「え～女子は、○○、○○、○○、○○、○…～そして安田」

奈美恵
「んっ」

きえ
「すーっごーい！」

奈美恵
「はっ？え、まぢ？」

コーチ
「では、今日は解散！」

きえ
「すごいじゃん！
奈美恵！
1年で選ばれたの奈美恵だけやん！」

奈美恵
「あ、あぁ…うん、ありがと」

俊
「安田っ！」

奈美恵
「あっ柄本先輩」

俊
「すげーじゃん！」

きえ
「…」

（奈美恵：きえ、先輩が好きだった…）

奈美恵
「ありがとうございますっじゃ、きえ、いこ！」

そのまま奈美恵は部室へ向かった

きえ
「せ、先輩、すごいですね！えっと……頑張って下さい！」

俊はきえにニコリと笑って
ありがとう、と言った。

きえ
「…じ、じゃぁ！っ」
きえも部室に向かった。

きえ
「つ、柄本先輩！」

俊
「ん？」

きえ
「あのぅ……メールアドレス、教えてくれませんか…？」

俊
「…いいよっ」

笑顔でこたえ、紙にアドレスを書き、
きえに手渡した。

俊
「じゃーねっ」

きえを待っていた奈美恵は部室の前で
二人を見ていた

（奈美恵：きえ、頑張ってる。……）

きえ
「奈美恵！メルアド聞いたよーぅ、すっごい緊張したぁ！」

奈美恵
「頑張ったね！着替えよ？」

きえ
「うんっ！」

幸せそうに笑うきえを奈美恵は、

かわいいな、と思った。

部室にはいると先輩が言った

「安田さん！コート整備をしてきてくれないかな？一面だけだから！」

「あ、はい！」

「ごめんねっ！コーチが安田さんにさせろっていってたの」

「いえ！いいですよ！
きえ、ごめんだけど着替えといていいよ！」

「わかったぁ。奈美恵期待されてるね！」

奈美恵はまたコートに向かった。

コートでは一面に一人ずつ整備をしていた。

奈美恵のコートの隣は

俊が整備していた。

俊
「安田！また会ったな笑」

奈美恵
「っあぁ…ですね」

俊
「…俺に怒ってる？」

奈美恵
「えっ？！や、別に。」

俊
「よかった！」

奈美恵
「…」

俊
「なぁなぁ、
お前と仲いいやついん
じゃん？あいつ誰？」

奈美恵
「…笑」

俊
「ばーか！笑うな！
失礼だろ！」

奈美恵
「だって（笑）
何で知らないんで
すかあ？
さっきも同い年の
女子にひどいこと
…っ」

俊
「きーてたんかよ。」

奈美恵
「…」

俊
「俺、テニス部の1年

お前しかわかんねーや」

奈美恵
「……。
きえですよっ。
あの子の名前。」

俊
「…そっか！さんきゅ！」

光
「俊！早くしねーと
俺のコート整備終わっ
ちまうぜ。」

他のコートを見渡すと
もぅほとんどがおわりかけてる。

奈美恵と俊は時間がかかったから、ボールを部室になおすように言

われた。

奈美恵
「…せ、先輩、さっききえにアド聞かれてたでしょ！」

俊
「なんだ？お前も知りたいって？笑」

奈美恵
「違いますーぅ」

奈美恵はむっつりした。

俊
「……ばぁか。お前まぢなごむ」

俊を見て奈美恵は照れて
下をむいた。

「奈美恵。」

部室の近くにたくやが
立っていた。

たくや
「何してんの？」

奈美恵
「わっごめん！待った？」

たくや
「…いや、大丈夫だよ。」

奈美恵
「ごめん！

急ぐから！」

部室の倉庫にボールを
なおす

俊
「…じゃぁな。」

奈美恵
「さよならっ！」

急いで倉庫から出ていく奈美恵の背中を
俊はしばらくながめていた。

光
「おー俊。遅かったな」

俊
「お前着替えんのおそっ　　女子かっ！」

光
「…。」

俊
「俺のツッコミに
ひくなっ涙」

光
「はいはい。おもしろい笑」

俊は笑ってジャージを
脱ぎはじめた

汗をタオルでふきながら
窓を開けた。

光
「…なぁ。さっきの話だけど。」

俊
「…。あぁ」

光

「鈴木さん。彼氏できた　　らしいぜ。」

俊
「…軽いやつだな。」

光
「俊、元気だせよ
もぅ相手も彼氏でき
たんだからさ。」

俊
「俺は元カノズルズル引きずるやつじゃねぇよ。」

光
「…。内心そうはいえねーんじゃないの？」

俊
「…。ばーか。
言えるよ。多分、な。」

光
「…無理はすん…」

〈プシューーーッ〉

俊はワキシューを
光にふりかけた。

光
「ばっか！なにすんじゃ！」

俊
「そんな話したからお仕置きだ！」

〈シューーーッ〉

男子の部室は
ワキシューの石鹸
の香りでぷんぷん
してた

部室の窓の近くで
話を聞いていた
きえは携帯をにぎりしめて
何もなかったかのように

通りすぎた。

窓から石鹸の匂いが
たちこめてた。

きえ
「たくやっ。ずっと待ってたの？」

たくや
「うん、まぁね。」

きえ
「…そっ。

ったくぅー
奈美恵の事大好き
なんだからっ。」

「…大好きだよ、」

きえ
「奈美恵、離さないでね。」

そうしてきえは帰って行った。

――――――――――――

奈美恵
「ごめん！」

たくや
「…いや、いいよ」
無言のまま
二人でかえる。

ちょうど近道に公園にはいった。

奈美恵
「怒っちゃった…よね？」

たくや
「…」

たくやは奈美恵を
抱きしめた

奈美恵
「…お、おーい？」

たくや
「…いやだよ…」
…（…仲良く…すんなよ）

奈美恵
「ごめん！怒ったよね？」

首をふるたくやに
奈美恵は戸惑った

たくや
「離したくない。

…お願い、離れな　　いで。」

奈美恵
「…離さないでね？」
奈美恵は少したくやからはなれ、
微笑む

たくや（離さない。絶対）

たくや
「ねぇ、目ぇ
閉じて？」

奈美恵は目をとじた

そしてたくやは
そっとキスをした。

「返事、きこえた？」

そういうたくやに

奈美恵は笑った

それにつられてたくやも

笑った

奈美恵は家に帰ると

携帯をチェックした。

たくや。

今日も楽しかった！

ありがとうな！

あと…嫌だったかな?!

奈美恵。

あたしも楽しかった!
また一緒に帰ろうねっ

嫌って…?

たくや。

ぉう!
奈美恵といると
めっちゃ落ち着く!

あの、キス……汗

奈美恵。

あたしも!

そんなことないよ!
緊張してしまった!笑

（奈美恵：初めてキスしちゃった）

ベットにころがり
枕に顔を埋める。

するとメールが
届いた。

ょぅ。
誰でしょー？！ヽ（´∀｀）ノ

見覚えのないアドだ…

〈チャララン♪〉

あ、きえだ

ーーーーーーーーーーーー

きえ。
柄本先輩が
奈美恵のアド教えて
って。

…だから教えといたから！

ーーーーーーーーーーーー

だるっ！女の子のこうゆうトラブルだるっ！

じゃぁさっきのは
柄本先輩のアド……。

とりあえず返事を
うつことにした。

ーーーーーーーーーーーー　奈美恵。

こんばんは、
安田奈美恵です！

柄本先輩ですよね?!

柄本先輩

おう。　お前が知りたいっていったからな!笑

ゆってないし…奈美恵は
呆れて笑った。

奈美恵

言ってませんからぁ!笑

柄本先輩

お前レギュラーだろ?夏休みに県立運動公園
で試合あるから
×月〇日に
8時集合だって!

ーーーーーーーーーーーー

奈美恵

了解です！

ーーーーーーーーーーーー

そして今日の
俊と奈美恵の
メールは終わった。

試合、
夏休みにあるんだなぁ

それから
奈美恵はいつのまにか
寝てしまった。

奈美恵は夢を
見ました。

「柄本先輩！柄本先輩！」

「ん？」

「先輩、柄本先輩」
そう呼ぶ奈美恵に
俊は笑いかける。

「なんだよ？」

そんな俊に
奈美恵は悲しく
笑いました。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

奈美恵はおきても
悲しい気持ちのまま。

何故こんな夢を見なくては
いけなかったの？

あたしは

たくやと付き合ってる。

付き合ってるのに。

ヤバイヨ。。

ヤバイヨ。

自分の気持ちの整理が
つかないまま。

だけど学校に行く準備
をした。

何も考えないようにし
て学校に向かった。

「おはよう」

きえは奈美恵に言った。

「あ、きえおはよう」

奈美恵は夢のことが
忘れられない。

（きえ…そういえば先輩のことすきだった）

焦る気持ちと
ズキズキする感覚が
奈美恵を襲った

奈美恵は
夢を見られたかのよう
に思えてならない

「奈美恵？どうしたの？」

「えっ？いや、なにも！」

「奈美恵、先輩とめーるしたぁ？」

「あ、うん。試合のことだったよ！」

「なーんだっそっかあ！ちょっとびっくりしてたんだよ！笑」

「そ、そっか！」

奈美恵は
そういって苦笑いすることしかできなかった。

きえ
「奈美恵…？」

「ん？」

きえ
「あたし、柄本先輩のこと、すきだから。」

「え、あ、うん」

真剣な顔のきえに
奈美恵は戸惑う

「昨日ね、先輩にメールするときまじ緊張しちゃったぁ！」

「そぅかぁっ」

それからきえののろけを
奈美恵は聞かされた

そのうち先生がきて

授業が始まって

昼休みまであっという間
だった。

奈美恵は学校が楽しくて

いつも時間がはやく
感じていた。

きえ（前書き）

きえの視点。きえのことを書いています。　どうか見てください。

きえ

「先輩…メールアドレス、教えてくれませんか??」

きゃぁ言っちゃった!

「…いいよっ」

そうしてあたしは先輩のアドレスをゲットした。

いつの間にか

ほんとにいつの間にかなんだ

こんなに先輩のこと
好きになってしまったの

目で追ってしまう、
恥ずかしいくらい

入学してね、テニス部に入部して、本当によかったって思うんだ。

あの笑顔が本当に好き。

見るたびに惹かれていったよ

そしていつの間にか
好きになってた。

可笑しいよねっ
先輩のこと、あたし何も知らないのにね

少し奈美恵と仲いいけどさ…

奈美恵には、たくやだっているしっ

柄本先輩、
あたしがんばるから

先輩にアドレス聞いた日
男子部室の前で
先輩の声がしたよ

元カノに未練が
あったなんて知らなかった

先輩、つらいよね

でもね、
あたしが癒してあげたいんだっ

そんな人の事
忘れてよ

ううん
忘れさせてあげる。

きえ
「たくやっ…」

たくや偉いなぁ
ずっと待ってたんだ

奈美恵のこと本当に好きなんだから！

あたしもこんなふうに
先輩にあいされたーい！

なんてねっ

…

きえ
「奈美恵のこと
離さないでね」

奈美恵は友達だよ

分かってる

けど

柄本先輩と仲いいから
心配しちゃうよ…

きえ
「ただいまー。…」

分かってる
返事なんてかえってこない。
分かってるよ

今日もきえの家には誰もいない。

お父さんはトラックの運転手
何処へだって
荷物運んでいくんだ

遠いとこまで。

そんなだから会う機会は
とてもすくない。

お母さんは……

水商売。

あたしは一人っこ。

一人ぼっちの家に
いつも帰ってくる。

誰もいないのわかってる

返事がかえってこないことも…

あたしの親は

愛し合ってんのかな？

あたし、

お母さんたちの

子供だよね？

おかえりが

聞きたい

とりあえずきえは自分の部屋に入った。

あたしは柄本先輩にメールを打った。

↓きえ
柄本先輩！今日アドレスを聞いた中１のきえです

↓柄本先輩
おぅ！メールありがとう！柄本でーすっ

その後メールを
何通もした

きえは幸せでたくさん
な時間を過ごした

好きな人と
メールをしただけで
こんなに幸せになるなんて
自分でもおかしいやっ

深夜１時までメールをしていたが、

返事が俊から返ってこなくなったきえは
しばらく起きていた

その音は玄関からきこえた

ガチャガチャガチャ！！

びっくりしたきえは、
急いで玄関へ走った

「きえー」

玄関の向こうから
お母さんの声がか弱く聞こえてきた

ガチャッ

「お母さん！？」

するとお母さんは
ふらふらとマンションの家に入って来た

「おかえり、はやかったね…大丈夫？」

「えぇ。」

それだけいうと
お母さんはリビングに
手に持っていた携帯と荷物を投げ捨て、
お風呂へ向かった。

お母さん…きつそうだなぁ
あっそうだ！
おかゆつくってあげよう！
あたしも夜ご飯まだだったしね。

おかゆは、あっという間にできた。

きえ
「よしっ…と」

リビングのソファーに
あたしは座った。

ピルルルルル　ピルルルルル

…電話？

荷物のそばに無造作にポツンとある
母の携帯からだろうとおもったきえは

その携帯の前に座った

一度はためらってしまったあたしは、開けてみることを決意した。

そして開けたあたしは
戸惑った

きえ
「あれ？この携帯じゃない」

あたしの携帯かな？

慌てて自分の携帯をみたが、それも違うみたいだ。

きえは母のバッグを開け、中を見た。

「あっ…た」

お母さん、携帯、二つ持ってたんだ…知らなかったや

そしてきえは再びもう一つの方を開けた。

『佐藤健二』

画面にはそう写し出されていた。

きえは、通話ボタンを押して、携帯を
耳にあてた。

「あいちゃ～ん、健二だよーん
ホテル決まったからさぁ
○○○ラブホテルの
２０３号室のあの可愛い部屋の予約がとれたよ！
待ってるからさ、また準備できたら、…」

ブチッ。

そこまで聞いてきえは電話を切った。

再び画面にめをやって
電話帳、メール、全てをみた。

これは、水商売用の携帯だ。

そしてきえは、さっきの通話履歴を消して、バッグに携帯を戻し、
出来るだけ元の様に戻し終えたあと、
おかゆを母の分だけついで自分の部屋に戻った。

わかってるよ
そういう仕事なのは。

でもさ、改めて
目の当たりにしたらさ、

ほんとに、ほんとに
悲しいんだ。

わかってるのに
わかってるのに
わかってるのに

頭でそう思ってるけど

あたし、わかってないんだね。

ちゃんと経験しないと、

分かんないんだよね

お母さん〜
あたし悲しくて
悲しくて

笑えるよ〜

みんな、しってた？

経験しないと人の気持ちなんてね、
分からないんだよ？

わかってるって
思うでしょ？

それ、錯覚なの。
分かってあげられてるって思ってるけど分かってあげられてないんだよ。

分かってあげられるときは、
同じ事があなたに起きたとき。相手が自分のこと分かるよって言っても
あたし

分かってねぇんだよって

思っちゃうんだ。

でも相手が
わかろうとしてくれてるのが分かるからあたしは、
分かってない、なんて
言えないの。

そんな時ね、

同じ辛さ、教えてあげたいっておもってしまうんだ。

馬鹿だよね。

でも安心して？

まだあたし、そんなことしてみたことないから

きえ（後書き）

更新が遅れてすみませんでした！これからも長い目で見ていただくと嬉しいです。＾＾

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3858e/

恋日々

2010年10月11日00時54分発行